

与謝野晶子訳

源氏物語 胡蝶卷



一冊堂青空文庫

源氏物語

胡蝶

紫式部

與謝野晶子訳

盛りなる御代みよの后きさきに金の蝶てふしろがねの

鳥花たてまつる

(晶子)

三月の二十はつか日過ぎ、六条院の春の御殿の庭は平生にもまして多くの花が咲き、多くさえずる小鳥が来て、春はここにばかり好意

を見せていると思われるほどの自然の美に満たされていた。築山^{つぎやま}の木立ち、池の中島のほとり、広く青み渡った苔^{こけ}の色などを、ただ遠く見ているだけでは飽き足らぬものがあるうと思われる若い女房たちのために、源氏は、前から造らせてあつた唐風の船へ急に装飾などをさせて池へ浮かべることにした。船下ろし^おの最初の日には御所の雅楽寮の伶人^{れいじん}を呼んで、船樂を奏させた。親王がた高官たちの多くが参会された。このごろ中宮は御所から歸つておいでになった。去年の秋「心から春待つ園」の挑戦^{ちようせん}的な歌をお送りになったお返しをするのに適した時期であると紫の女王^{にょおう}も思うし、源氏もそう考えたが、尊貴なお身の上では、ちよつとこちら

へ招待申し上げて花見をおさせするというようなことが不可能であるから、何にも興味を持つ年齢の若い宮の女房を船に乗せて、西東続いた南庭の池の間に中島の岬みさきの小山が隔てになっているのを漕こぎ回らせて来るのであった。東の釣殿つりどのへはこちらの若い女房が集められてあった。竜頭鷁首りゅうつとうげきしゅの船はすっかり唐風に装われてあつて、梶取かじとり、棹取さおとりの童侍わらわぎむらいは髪を耳の上でみずらに結わせて、これも支那風しなの小童に仕立ててあった。大きい池の中心へ船が出て行った時に、女房たちは外国の旅をしている気がして、こんな経験のかつてない人たちであるから非常におもしろく思った。中島の入り江になった所へ船を差し寄せて眺望ちやうぼうをするので

あつたが、ちよつとした岩の形なども皆絵の中の物のようであつた。あちらにもそちらにも霞かすみと同化したような花の木の梢こずえが錦にしきを引き渡していて、御殿のほうははるばると見渡され、そちらの岸には枝をたれて柳が立ち、ことに派手はでに咲いた花の木が並んでいた。よそでは盛りの少し過ぎた桜もここばかりは真盛まさかりの美しさがあつた。廊を廻つた藤ふじも船が近づくにしたがつて鮮明な紫になつていく。池に影を映した山吹やまぶきもまた盛りに咲き乱れているのである。水鳥の雌雄の組みが幾つも遊んでいて、あるものは細い枝などをくわえて低く飛び交かつたりしていた。鴛鴦おしどりが波の綾あやの目に紋を描いている。写生しておきたい気のする風景ばかりが次々

に目の前へ現われてくるのであったから、仙人せんじんの遊戯ゆうぎを見ている
うちに斧おのの木の柄が朽ちた話と同じような恍惚こうこつ状態になつて女房
たちは長い時間水上にいた。

風吹けば浪なみの花さへ色見えてこや名に立てる山吹さきの崎

春の池や井手の河瀬かはせに通ふらん岸の山吹底にほも匂にほへり

亀かめの上の山も訪ねたづじ船の中に老いせぬ名をばここに残さん

春の日のうららにさして行く船は竿さをの雫しづくも花と散りける

こんな歌などを各自が詠よんで、行く先をも帰る所をも忘れるほ

ど若い人たちのおもしろがつて遊ぶのに適した水の上であつた。暮れかかるころに「皇※」みづひめという樂の吹奏が波を渡つてきて、人々の船は歡樂陶醉の中に岸へ着き、設けられた釣つり殿の休息所へはいつた。ここの室内の裝飾は簡単なふうにしてあつて、しかも艶えんなものであつた。各夫人の若いきれいな女房たちが、競つて華美な姿をして待ち受けていたのは、花の飾りにも劣らず美しかった。曲のありふれたものでない樂が幾つか奏されて、舞い手にも特に選拔された公達きんだちが出され、若い女に十分の満足を与えた。夜になつてしまったことを源氏は残念に思つて、前の庭に篝かがりをとぼさせ、階段の下こけの苔の上へ音楽者を近く招いて、堂上の親王が

た、高官たちと堂下の伶人^{れいじん}とで大合奏が行なわれるのであった。専門家の中の優美な者だけが選ばれて、双調^{そうつしやう}を笛で吹き出したのをはじめに、その音を待ち取った絃樂^{げんがく}が上で起こったのである。絃樂の人ははなやかな音をかき立てて、歌手は「安名尊^{あなとうと}」を歌った。生きがいのあることを感じながら庶民たちまでも六条院の門前の馬や車の立てられた蔭^{かげ}へはいつてこれらを聞いていた。春の空に春の調子の楽音の響く効果というものを、こうした大管絃樂を行なって堂上の人々は知ったであろうと思われた。終夜音楽はあった。呂^ろの樂を律へ移すのに「喜春樂^{きしゅんらく}」が奏されて、兵部卿^{ひょうぶきやう}の宮は「青柳^{あおやぎ}」を二度繰り返してお歌いになった。それには源氏も

声を添えた。夜が明け放れた。この朝ぼらけの鳥のさえずりを、中宮は物を隔ててうらやましくお聞きになったのであった。常に春光の満ちた六条院ではあるが、外来者の若い興奮をそそる対象のないことをこれまで物足らず思った人もあったが、西の対の姫君なる人が出現して、これという欠点のない人であること、源氏が愛して大事にかしづくことが世間に知れた今日では、源氏の預期したとおりに思慕を寄せる者、求婚者になる者が多かった。わが地位に自信のある人たちは、女房などの中へ手蔓てづるを求めて姫君へ手紙を送る方法もあるし、直接に意志を源氏へ表明することも可能であるが、そうした大胆なことはできずに、心だけを悩まし

ている若い公達^{きんだち}などもあることと思われる。その中にはほんとうのことを知らずに、内大臣家の中將などもあるようである。兵部卿の宮も長く同棲^{どうせい}しておいになった夫人を亡^なくしておしまいになつて、もう三年余りも寂しい独身生活をしておいでになるのであつたから、最も熱心な求婚者であつた。今朝^{けさ}もずいぶん酔つたふうをお作りになつて、藤^{ふじ}の花などを簪^{かざし}にさして、風流な乱れ姿を見せておいでになるのである。源氏も計画どおりになつていくと、心では思うのであるが、つとめて素知らぬ顔をしていた。酒杯のまわつて来た時、迷惑な色をお見せになつて宮は、

「私がある望みを持っていけないのでしたら、逃げ出してしまふ所

ですよ。もういけません」

と言って、手をお出しになろうとしない。

紫のゆゑに心をしめたれば淵ふちに身投げんことや惜しけき

とお言いになつてから、源氏に、

「あなたはお兄様なのでからお助けください」

と源氏にその杯をお譲りになるのであつた。源氏は満面に笑えみを見せながら言う。

淵に身を投げつべしやとこの春は花のあたりを立ちさらで見
ん

源氏がぜひと引きとめるので、宮もお帰りになることができなかった。
かった。

今朝^{けさ}の管絃楽はまたいっそうおもしろかった。この日は中宮が
僧に行なわせられる読経^{どきょう}の初めの日であつたから、夜を明かした
人たちは、ある部屋^{へや}部屋^{べや}で休息を取ってから、正装に着かえてそ
ちらへ出るのも多かった。障^{さわ}りのある人はここから家へ歸つた。
正午ごろに皆中宮の御殿へ参つた。殿上役人などは残らずそのほ

うへ行つた。源氏の盛んな権勢に助けられて、中宮は百官の全まい
尊敬を得ておいでになる形である。春の女王にょおうの好意で、仏前へ花
が供せられるのであつたが、それはことに美しい子選ばれた童
女八人に、蝶ちようと鳥を形どつた服装をさせ、鳥は銀の花か瓶びんに桜のさ
したのを持たせ、蝶には金の花瓶に山吹をさしたのを持たせて
あつた。桜も山吹も並み並みでなくすぐれた花房はなぶさのものがそろえ
られてあつた。南の御殿の山ぎわの所から、船が中宮の御殿の前
へ来るころに、微風が出て瓶の桜が少し水の上へ散っていた。う
ららかに晴れたその霞の中から、この花の使者を乗せた船の出で
来た形は艶えんであつた。天幕をこちらの庭へ移すことはせずに、左

へ出た廊を樂舎のようにして、腰掛けを並べて樂は吹奏されていたのである。童女たちは階梯きざはしの下へ行って花を差し上げた。香炉を持って仏事の席を練っていた公達きんだちがそれを取り次いで仏前へ供えた。紫の女王の手紙は子息の源中将が持って来た。

花園の胡蝶こてふをさへや下草に秋まつ虫はうとく見るらん

というのである。中宮はあの紅葉もみじに対しての歌であると微笑し
て見ておいでになった。昨日きのう招かれて行った女房たちも春をおけ
なしになることはできますまいと、すっかり春に降参して言って

いた。うららかな鶯うぐいすの声と鳥の樂が混じり、池の水鳥も自由に場所を変えてさえずる時に、吹奏樂が終わりの急な破はになったのがおもしろかった。蝶ちやうははかないふうに飛び交かって、山吹が垣かきの下に咲きこぼれている中へ舞って入る。中宮の亮すけをはじめとしてお手伝いの殿上役人が手に手に宮の纏頭てんとうを持って童女へ賜わった。鳥には桜の色の細長、蝶へは山吹やまぶきを襲かさねをお出しになったのである。偶然ではあったがかねて用意もされていたほど適当な賜物たまものであった。伶人れいじんへの物は白の一襲ひとかさね、あるいは巻き絹などと差があった。中將へは藤ふじの細長を添えた女の装束をお贈りになった。中宮のお返事は、

昨日は泣き出したくなりますほどうらやましく思われました。

こてふにも誘はれなまし心ありて八重山吹を隔てざりせば

というのであった。すぐれた貴女きじよがたであるが歌はお上手じょうずでな
かったのか、ほかのことに比べて遜色そんしよくがあるとこの御贈答などで
は思われる。昨日のことであるが、招かれて行った女房たちの、
中宮のほうから来た人たちには意匠のおもしろい贈り物がされた
のであった。そんなことをあまりこまごまと記述することは読者
にうるさいことであるから省略する。毎日のようにこうした遊び

をして暮らしている六条院の人たちであつたから、女房たちもまた幸福であつた。各夫人、姫君の間にも手紙の行きかいが多かつた。

玉鬘たまかずらの姫君はあの踏歌とうかの日以来、紫夫人の所へも手紙を書いて送るようになった。人柄の深さ浅さはそれだけで判断されることでもないが、落ち着いたなつかしい気持ちの人であることだけは認められて、花散里はなちるさとからも、紫の女王からも玉鬘は好意を持たれた。結婚を申し込む人は多かつた。いいかげんに自分だけのこととはだれにと決めてしまうことのできないことであると源氏は思っているのであつた。自身でも親の心になりきってしまうこと

が不可能な気がするのか、実父に玉鬘たまかざらの存在を報ぜようかという
考えの起こることも間々あった。源中將は親しい気持ちで玉鬘の
居間の御簾みすに近く来て話すこともある。玉鬘もそれに対して、自
身が直接話をしなければならぬことになっているのを女は恥ず
かしく思ったが、兄弟ということになっっているのであるからと
いって、右近たちは睦まじくすることを勧めていた。中將はいつ
もまじめで、よけいな想像などはしないふうで、姉と信じてい
た。内大臣家の公達きんだちも中將に伴われてこちらの御殿へ、下心をほ
のめかすふうに來たりもするのであるが、そうした問題ではなし
に、なつかしい気持ちでほんとうの兄弟たちを玉鬘はながめてい

た。実父に逢^あいたいと常に人知れず思うのであるが、その素振り
は見せずに、信頼しきった様子だけが源氏に見えるのも、いつそ
う可憐^{かれん}に、いつそう処女らしくこの人を思わせた。似ているとい
うのではないがやはり母の夕顔のよさがそのままこの人にもあつ
て、その上に才女らしいところが添っていた。

衣がえをする初夏は、空の気持ちなども理由なしに感じのよい
季節であるが、閑暇^{ひま}の多い源氏はいろいろな遊び事に時を使つて
いた。玉鬘のほうへ男性から送って来る手紙の多くなることに興
味を持って、またしても西の対へ出かけてはそれらの懸想文^{けそうぶみ}を源
氏は読むのであった。あるものは返事を書けと源氏が勧めたりす

るのを玉鬘は苦しく思った。兵部卿ひょうぶきやうの宮がまだ何ほどの時間が経過しているのでもないのに、もうあせって恨みらしいことをたくさんお書きになった手紙を、ほかの手紙の中から見いだして心からおかしそうに源氏は笑った。

「私は若い時からおおぜいの兄弟たちの中で、この宮とだけは最も親密な交際ができたのだが、恋愛問題については私に話されたことがなかったし、私もその方面のことは別にしてあったものだが、今になって宮の恋のお悩みに触れるということで、私は満足もでき、また物哀れな気にもなる。ぜひこのかたなどにはお返事をお書きなさい。少し見識を備えた女が、交際を始める価値のあ

る男と言つてはこの宮以外にあるとも思えないかたなのですから
ね」

などと若い女の心を惹ひきそうなことを源氏は言うのであるが、
玉鬢はただ恥ずかしくばかり聞いていた。右大將が高官の典型の
ようなまじめな風采ふうさいをしながら、恋の山には孔子も倒れるという
諺ことわざをほんとうにして見せようとするふうな熱意のある手紙を書い
ているのも源氏にはおもしろく思われた。そうした幾通かの中
に、薄青色の唐紙の薰物たきものの香を深く染しませたのを、細く小さく結
んだのがあつた。あけて見るときれいな字で、

思ふとも君は知らじな湧^わき返り岩洩^もる水に色し見えねば

と書いてある。書き方に近代的なはかなさが見せてあるのである。

「これはどんな人ですか」

と源氏は聞くのであるが、はかばかしい返辞を玉鬘はしない。

源氏は右近を呼び出した。

「こんな手紙をよこす人たちに細心な注意を払ってね、分類をしてね、返事をすべき人には返事をさせなければいけない。近ごろの男が暴力で恋を遂げるといふようなことも、必ずしも男の咎^{とが}ば

かりではない。それは私自身も体験したことで、あまりに冷淡だ、無情だ、恨めしいと、そんな気持ちも積もり積もって、無法をしてしまうのだ。またそれが身分の低い女であれば、失敬な態度だと思つては罪を犯すことにもなるのだ。たいしたことではない、花や蝶につけての返事はして、この程度の交際を持続させておくことも相手を熱心にさせる効果のあるものだからね。あるいはまたそれなりに双方で忘れてしまうことになつても少しもさしつかえのないことだ。けれどまた誠意のない出来心で手紙をよこしたような場合にすぐ返事を書いてやるのもよろしくない。あとで批難されても弁解のしようがない。全体女というものは、慎み

深くしていずに、動いた感情をありのままに相手へ見せることをしては、結果は必ずよくないものだが、宮や大將が謙遜^{けんそん}な態度をとって、いいかげんな一時的な恋をされる訳はないのだからね。いつも返事をせずに自尊心を持ち過ぎた女のように思わせるのも、この人にはふさわしくないことだからね。またそれ以下の人たちのことは、忍耐力の強さ、月日の長さ短さによって、それ相応に好意的な返事をするのだね」

と源氏が言っている間、顔を横向けていた玉鬘^{たまかすり}の側面が美しく見えた。派手^{はで}な薄色^{はくしき}の小桂^{こけい}に撫子色^{なでしこ}の細長を着ている取り合わせも若々しい感じがした。身の取りなしなどに難はなかったという

ものの、以前は田舎の生活から移ったばかりのおおようさが見えるだけのものであった。紫夫人などの感化を受けて、今では非常に柔らかな、繊細な美が一挙一動に現われ、化粧なども上手じょうずになつて、不満足な氣のするようなことは一つもないはなやかな美人になつていた。人の妻にさせては後悔が残るであろうと源氏は思った。右近も二人を微笑ほほえんでながめながら、父親として見るのに不似合いな源氏の若さは、夫婦であつたなら最もふさわしい配偶であらうと思つていた。

「ほかからのお手紙のお取り次ぎは決してだれもいたさないのでございます。前からも送つておいでになります方のは、三度も四

度も続けてお返しばかりしてはと思ひまして、ただ私たちだけでお預かりしているのでございますから、お返事は、殿様が書けとお言いになります分だけを、それも迷惑がってお書きになるだけなのでございます」

と右近が言う。

「それにしてもこの控え目な結んであつた手紙はだれのかね。苦心の跡の見えるものだ」

微笑を浮かべながら源氏はこの手紙に目を落としていた。

「それはぜひ置かせてくれとお言いになつたのでございまして、内大臣家の中将さんがこちらの海松子^{みるこ}を前に知っていらっしゃい

まして、海松子が持って参ったのでございます。だれもまだ内容は拝見しておりませんでした」

「かわいい話ではないか。今は殿上役人級であつても、あの人たちに失敬なことをしていい訳はない。公卿こうけいといつてもこの人の勢いに必ずしも皆まで匹敵できるものでない。私の予言は必ず当たるよ。この人たちには露骨でなく、上手じょうずに切尖きつさきをはずさせるように工夫くふうするのだね。おもしろい手紙だよ」

と言つて、源氏はその手紙をすぐにも下へ置かずに見ていた。

「私がいろいろと考えたり、言つたりしていても、あなたにこうしたいと思つておいでになることがないのであろうかと、気づか

わしい所もあります。内大臣に名のって行くことも、まだ結婚前のあなたが、長くいっしょにいられる夫人や子供たちの中へはいつて行って幸福であるかどうか疑問だと思って私は躊躇ちゅうちゅうしているのです。女として普通に結婚をしてから出会う機会をとらえたほうがいいと思うのですが、その結婚相手ですね、兵部卿の宮は表面独身ではいられるが、女好きな方で、通ってお行きになる人の家も多いようだし、また邸やしきには召人めしゆうでいという女房の中の愛人が幾人もいるということですからね、そんな関係というものは、夫人になる人が嫉妬しつとを見せないで自然に矯正きようせいさせる努力さえすれば、世間へ醜態も見せずに穏やかに済みますが、そうした気持ち

になれない性格の人は、そんなつまらぬことから夫婦仲がうまく
ゆかずに、良人の愛を失^{おっと}ってしまいう結果にもなりますから、ある
覚悟がいりますよ。右大將は若い時からいっしょにいた夫人が年
上であることなどから、その人と別れるためにも、新たな結婚を
したがっているのですが、しかし、それも面倒^{めんどろ}の添った縁だと人
の言うそれですからね、だから私も相手をだれとも仮定して考え
て見ることができないのです。こんなことは親にもはつきりと意
見の述べられない問題なのだが、あなたもひどくまだ若いという
のではないから、自身の結婚する相手について判断できない訳
はないと思う。私をあなたのお母様だと思って、何でも相談して

くだすったらいと思う。あなたに不満な思いをさせるような結婚はさせたくないと思っっているのです」

こう源氏はまじめに言っていたが、玉鬘はたまかづどう返事をしてよいかわからないふうを続けているのもさげすまれることになるであろうと思っ言った。

「まだ物心のつきませんころから、親というものを目に見ない世界にいたのでございますから、親がどんなものであるか、親に対する気持ちはどんなものであるか私にはわかってないのでございます」

このおおような言葉がよくこの人を現わしていると源氏は思っ

た。そう思うのがもつともであるとも思った。

「では、親のない子は育ての親を信賴すべきだという世間の言いならわしのうちに私の誠意をだんだんと認めていってくれますか」

などと源氏は言っていた。恋しい心の芽ばえていることなどは氣恥ずかしくて言い出せなかった。それとなくその氣持ちを言う言葉は時々混ぜもするのであるが、氣のつかぬふうであつたから、歎息たんそくをしながら源氏は歸って行こうとした。縁に近くはえた呉竹くれたけが若々しく伸びて、風に枝を動かす姿に心が惹ひかれて、源氏はしばらく立ちどまって、

「ませのうらに根深く植ゑし竹の子のおのがよよにや生^おひ別るべき

その時の気持ちが想像されますよ。寂しいでしょうからね」

外から御簾^{みす}を引き上げながらこう言った。玉鬘^{たまむす}は膝行^{いざ}って出て言った。

「今さらにいかならんよか若竹の生ひ始めけん根をば尋ねんかえって幻滅を味わうことになるでしょうから」

源氏は哀れに聞いた。玉鬘の心の中ではそうも思っているのではなかった。どんな時に機会が到来して父を父と呼ぶ日が来るのであるうとたよりない悲しみをしているのであるが、源氏の好意に感激はしていて、実父といっても初めから育てられなかった親は、これほどこまやかな愛を自分に見せてくれないのではあるまいかと、古い小説などからもいろいろと人生を教えられている玉鬘たまかは想像して、自身が源氏の感情を無視して勝手に父へ名のって行くことなどはできないとしていた。

源氏は別れぎわに玉鬘の言ったことで、いつそうその人を可憐かれんに思つて、夫人に話すのであつた。

「不思議なほど調子のなつかしい人ですよ。母であつた人はあまりに反撥性^{はんぱつ}を欠いた人だったけれど、あの人は、物の理解力も十分あるし、美しい才気も見えるし、安心されないような点が少しもない」

この源氏の賞め言葉^ほを聞いていて夫人は、良人^{おとと}が単に養女として愛する以外の愛をその人に持つことになっていく経路を、源氏の性格から推して察したのである。

「理解力のある方にもせよ、全然あなたを信用してたよつていてはどんなことにおなりになるかとお気の毒ですわ」

と女王^{にょおつ}は言った。

「私は信頼されてよいだけの自信はあるのだが」

「いいえ、私にも経験があります。悩ましいような御様子をお見せになったことなど、そんなこと私はいくつも覚えているのですもの」

微笑をしながら言っている夫人の神経の鋭敏さに驚きながら、源氏は、

「あなたのことなどといっしよにするのはまちがいですよ。そのほかのことで私は十分あなたに信用されてよいこともあるはずだ」

と言っただけで、やましい源氏はもうその話に触れようとしな

いのであったが、心の中では、妻の疑いどおりに自分はなっていないかという不安を覚えていた。同時にまた若々しいけしからぬ心であると反省もしていたのである。

気にかかる玉鬘を源氏はよく見に行った。しめやかな夕方に、前の庭の若楓わかかえでと柏かしわの木がはなやかに繁り合っていて、何とはなしに爽快そうかいな気のされるのをながめながら、源氏は「和しまた清し」と詩の句を口ずさんでいたが、玉鬘の豊麗ようぼうな容貌が、それにも思いついて、西の対へ行った。手習いなどをしながら気楽な風でいた玉鬘が、起き上がった恥ずかしそうな顔の色が美しく思われた。その柔らかいふうにふと昔の夕顔が思い出されて、源氏は悲

しくなつたまま言つた。

「あなたにはじめて逢^あつた時には、こんなにまでお母様に似てい
るとは見えなかったが、それからのは時々あなたをお母様だと
思うことがあるのですよ。その点ではずいぶん私を悲しがらせる
あなただ。中將が少しも死んだ母に似た所がないものだから、親
子というものはそれくらいのものかと思つていましたかね、あな
たのような人もまたあるのですね」

涙ぐんでいるのであつた。そこに置かれてあつた箱の蓋^{ふた}に、菓
子と橘^{たちばな}の実を混ぜて盛つてあつた中の、橘を源氏は手にもてあそ
びながら、

「橘のかをりし袖そでによそふれば変はれる身とも思ほえぬかな

長い年月の間、どんな時にも恋しく思い出すばかりで、慰めは少しも得られなかった私が、故人にそのままあなたを家の中で見ることは、夢でないかとうれしいにつけても、また昔が思われます。あなたも私を愛してください」

と言って、玉鬢たまかざらの手を取った。女はこんなふうに扱われたことがなかったから、心持ちが急に暗く憂鬱ゆううつになったが、ただ腑ふに落ちぬふうを見せただけで、おおようにしながら、

袖の香をよそふるからに橘のみさへはかなくなりもこそすれ

38

と言ったが、不安な気がして下を向いている玉鬘の様子が美しかった。手がよく肥えて肌目はだめの細かくて白いのをながめているうちに、見がたい物を見た満足よりも物思いが急にふえたような気が源氏にした。源氏はこの時になってはじめて恋をささやいた。女は悲しく思つて、どうすればよいかと思うと、身体からだに慄ふるえの出てくるのも源氏に感じられた。

「なぜそんなに私をお憎みになる。今まで私はこの感情を上手じょうずにおさえていて、だれからも怪しまれていなかったのですよ。あな

たも人に悟らせないようにつとめてください。もとから愛している上に、そうなればまた愛が加わるのだから、それほど愛される恋人というものはないだろうと思われる。あなたに恋をしている人たちより以下のものに私を見るわけではないでしょう。こんな私のような大きい愛であなたを包もうとしている者はこの世にないはずなので、私が他の求婚者たちの熱心の度にあきたらないもののあるのはもつともでしょう」

と源氏は言った。変態的な理屈である。雨はすっかりやんで、竹が風に鳴っている上に月が出て、しめやかな気になった。女房たちは親しい話をする主人たちに遠慮をして遠くへ去っていた。

始終逢^あっている間柄ではあるが、こんなよい機会もまたとないよ
うな気がしたし、抑制したことが口へ出てしまったあとの興奮も
手伝って、都合よく着ならした上着は、こんな時にそつと脱ぎす
べらすのに音を立てなかったから、そのまま玉鬘の横へ寝た。玉
鬘は情けない気がした。人がどう言うであろうと思うと非常に悲
しくなった。実父の所であれば、愛は薄くてもこんな禍^{わざわ}いはな
かったはずであると思うと涙がこぼれて、忍ぼうとしても忍びき
れないのである。玉鬘がそんなにも心を苦しめているのを見て、
「そんなに私を恐れておいでになるのが恨めしい。それまでに親
しんでいなかった人たちでも、夫婦の道の第一歩は、人生の掟^{おきて}に

従って、いっしょに踏み出すのではありませんか。もう馴染なじんでから長くなる私が、あなたと寝て、それが何恐ろしいことですか。これ以上のことを私は断じてしませんよ。ただこうして私の恋の苦しみを一時的に慰めてもらおうとするだけですよ」

と源氏は言ったが、なお続いて物哀れな調子で、恋しい心をいろいろに告げていた。こうして二人並んで身を横たえていることで、源氏の心は昔がよみがえったようにも思われるのである。自身のことではあるが、これは軽率なことであると考えられて、反省した源氏は、人も不審を起こすであろうと思って、あまり夜も更ふかさないうで帰って行くのであった。

「こんなことで私をおきらいになつては私が悲しみますよ。よその人はこんな思いやりのありすぎるものではありませんよ。限りもない、底もない深い恋を持っている私は、あなたに迷惑をかけるような行為は決してしない。ただ帰つて来ない昔の恋人を悲しむ心を慰めるために、あなたを仮にその人としてもものを言うことがあるかもしれませんが、私に同情してあなたは仮に恋人の口ぶりでものを言つていくだすつたらいいのだ」

と出がけに源氏はしんみりと言うのであつたが、玉鬘たまかづらはぼうとなつていて悲しい思いをさせられた恨めしさから何とも言わない。

「これほど寛大でないあなたとは思っていなかったのに、非常に憎むのですね」

と歎息たんそくをした源氏は、

「だれにもいっさい言わないことにしてください」

と言って帰って行った。玉鬘は年齢からいえば何ももうわかっていてよいのであるが、まだ男女の秘密というものはどの程度のもを言うのかを知らない。今夜源氏の行為以上のものがあると
も思わなかったから、非常な不幸な身になったようにも歎なげいてい
るのである。気分も悪そうであつた。女房たちは、「病気ででも
おありになるようだ」と心配していた。

「殿様は御親切でございますね。ほんとうのお父様でも、こんなにまでよくあそばすものではないでしょう」

などと、兵部がそつと来て言うのを聞いても、玉鬘は源氏がさげすまれるばかりであつた。それとともに自身の運命も歎かれた。

翌朝早く源氏から手紙を送つて来た。身体からだが苦しくて玉鬘は寝ていたのであるが、女房たちは硯すずりなどを出して来て、返事を早くするようにと言う。玉鬘はしぶしぶ手に取つて中を見た。白い紙で表面だけは美しい字でまじめな書き方にしてある手紙であつた。

例もないように冷淡なあなたの恨めしかったことも私は忘れられない。人はどんな想像をしたでしょう。

うちとけてねも見ぬものを若草のことありがほに結ばほるらん

あなたは幼稚ですね。

恋文であって、しかも親らしい言葉で書かれてある物であった。玉鬢は憎悪ぞうおも感じながら、返事をしないことも人に怪しませることであるからと思って、分の厚い檀紙だんしに、ただ短く、

拝見いたしました。病氣をしているものでございますから、失礼いたします。

と書いた。源氏はそれを見て、さすがにはつきりとした女であると微笑されて、恨むのにも手ごたえのある気がした。

一度口へ出したあとは「おほたの松の」（恋ひわびぬおほたの松のおほかたは色に出^いでてや逢はんと言はまし）というように、源氏が言いからんでくることが多くなって、玉鬘の加減の悪かった身体がなお悪くなっていくようであった。こうしたほんとうのことを知る人はなくて、家の中の者も、外の者も、親と娘としてばかり見ている二人の中にそうした問題の起こっていると、少し

でも世間が知ったなら、どれほど人笑われな自分の名が立つことであろう、自分は飽くまでも薄倖はっこうな女である、父君に自分のことが知られる初めにそれを聞く父君は、もともと愛情の薄い上に、軽佻けいちような娘であるとうとましく自分が思われねばならないことであると、玉鬢たまかざうは限りもない煩悶はんもんをしていた。兵部卿ひょうぶきやうの宮や右大將は自身らに姫君を与えてもよいという源氏の意向らしいことを聞いて、ほんとうのことはまだ知らずに、非常にうれしくて、いよいよ熱心な求婚者に宮もおなりになり、大將もなった。

「一冊堂・青空文庫」について

「一冊堂・青空文庫」は、青空文庫を紙の書籍で読むことができるよう、公開されているデータを pdf 形式に変換して、無料で配信させていただいております。変換に際して、旧仮名使い、ルビ等がうまく変換されない場合があります。できるだけ修正するようにしておりますが、お気付きの場合、ご連絡をいただければ、早急に修正データをアップロードいたします。ご協力いただきますようお願い申し上げます。

青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp>) は、著作権の消滅した作品や「自由に読んでもらってかまわない」とされたものを、テキストと XHTML（一部は HTML）形式で公開しているインターネット電子図書館です。青空文庫は、そのサイト運営も含め、電子データの作成や校正作業などはボランティアの皆さんの活動によって支えられています。



一冊堂・青空文庫 pdf データ

2016 年 3 月 15 日 第一期製作

原 稿 青空文庫

発行者 佐藤 聖

発行所 一冊堂

〒165-0025
東京都中野区沼袋 2-32-5 幸荘 C 室
mail : issatudo@gmail.com
